大山乳業農協における障がい者雇用の取組み

主事研究員 古江晋也

1 はじめに

「白バラ」牛乳のブランド名で親しまれている大山乳業農業協同組合(本所:鳥取県東伯郡琴浦町、以下「大山乳業農協」)の障がい者雇用率は2.58%と全産業平均1.69%(2012年度)、法定雇用率1.8%を大きく上回っている。同農協が障がい者雇用に取り組んできた背景には初代組合長の「地域の雇用を大切にしていきたい」という思いがあった。

2 大山乳業農協の発展

昭和20年、大手乳業メーカーは酪農が盛んであった鳥取県の酪農家から原乳を買い取り、牛乳等を生産していた。しかし「乳質のごまかし」や「買いたたき」などが横行しており、農家は酪農を続けていくことに大きな不安を抱いていた。この状況を打開するため32人の酪農家が任意組合「伯耆酪農組合」を設立した(昭和21年)。その後、同組合は法人組織(伯耆酪農農業協同組合)となり、昭和41年には伯



大山乳業本所

者、美保、東部の酪農協が合併、現在の大山 乳業農協となった(同時に鳥取県の指定生乳生 産者団体に指定された)。

大山乳業農協は、設立当初から一貫して組合員が生産した生乳を自工場ですべて処理、販売を行っており、その牛乳は「白バラ」のブランド名で地元に愛飲されてきた。ただ当時は生乳の生産量が拡大していた時期であり、地元で消費するだけでは限界があった。

そんな矢先の昭和40年代半ば、大手乳業メーカーの牛乳にヤシ油が混入しているという 疑惑が浮上した。この疑惑を契機に京都の生協は大山乳業農協と取引を開始。プライベートブランドとして牛乳を出荷することになった。

このように生協との取引を開始する一方、独自の販路の開拓にも取り組んだ。スーパーマーケットが全国に展開されるようになると、各メーカーは紙容器を採用、牛乳びんによる宅配チャネルを利用した販売額は次第に縮小した。しかし、「安定した需要を確保できる」との理由からびんで宅配することに力点を置いていた大山乳業農協は、現在でも牛乳の総販売額に占める宅配率が35%にのぼっている。

3 雇用の取組み

大山乳業農協は牛乳のほか、アイスクリームや菓子なども製造している。ただし、アイスクリームは夏季、菓子はクリスマスシーズンと需要が大きく偏っているため、全職員の

約35%は中途採用による臨時職員(有期契約) である。

現在、同農協では9名の障がいのある職員 (身体障がい6名、知的障がい2名、精神障がい 1名)が働いている。職員のなかには中途採用 者が多いが、その理由は県内の有効求人倍率 が低く、「働きたくても働けない」状況があっ たからである。

身体障がいのある職員は製造現場、物流事務、営業所などに勤務しているが、知的障がいと精神障がいのある職員は、洗びん(牛乳びんをリユースするための洗浄)業務を担当している。担当者は「製造ラインは機械があるため事故が生じる可能性もある。安全に継続して働いてもらう場所は現在、洗びん業務しかない」と語ってくれた。

本所工場で生産された新鮮な牛乳は毎日トラックで販売店に配送される。配送が終わったトラックは本所工場へと引き返すが、その際に販売店から牛乳等の空びんを回収する。空びんはケースに入れて返却されるが、なかには多種多様な牛乳びんが入っていることもある。3名の職員は販売店から返却されたケースのなかの牛乳びんを種類ごとにそろえ、牛乳びんに取り付けられたセロハンやゴミなどを取り除く業務を担当している。業務はすべて手作業。きれいにそろえられた牛乳びんは、機械で消毒や洗浄が行われた後、再び新鮮な牛乳が充てんされ、販売店に配送される。洗びんを担当している部署の職員は現在7

(注)障がいがあっても、社会のなかで普通の生活を 送れるように条件を整えること。



回収された牛乳びん

名。業務の指導やケアは管理職をはじめ、部署の職員が行っている。障がいのある職員を採用することが決まった当初、同部署には少なからず不安があったようだ。しかし単純な業務であっても一生懸命に行っている姿を見て徐々に仲間意識が芽生えるようになったという。

4 おわりに

一般的に知的障がい者や精神障がい者は相対的に雇用機会が少ない状況にある。そうしたなか、大山乳業農協では6年ほど前から雇用を開始した。ただし、「雇用の場を提供することにも限界がある」という現状も率直に語ってくれた。有効求人倍率が低迷している地域では、障がい者雇用を積極的に行うことが難しいという声をよく聞く。しかし、地域社会におけるノーマライゼーションの促進という観点から考慮すれば、障がい者雇用は重要な役割を担っている。

<参考資料>

・大山乳業農協資料。京都生協、大学生活協同組合京都事 業連合の各ウェブサイト。

(ふるえ しんや)